

根拠を述べるができない確信と「意識様態」

Confidence without any protocol of its source and appearance of consciousness

妻 藤 真 彦

「意識」についての心理学的問題は、哲学の問題と完全に切り放すことができず、これまでに提案されてきた幾つかの心理学上の「意識」理論は、作業仮説以上のものにはなっていない。というより、心理学全体で受け入れられている作業仮説といえるかどうか疑問がある(e.g., 妻藤, 1990; 1991; 1992)。機能主義的立場からは、「意識」は何らかの情報の「表現」であったり、自分自身をモニターするシステムであったり、あるいは行動や思考の方向・戦略を決定するといった「機能」の点から捉えられる。そして強いAIの古典的立場に近い論者は、「それ」は結局アルゴリズム、あるいは、それによって操作される「表現」であると主張する。これに対して、物理学と数学の立場から、Penrose (1989) はこのような「意識」の捉え方を批判し、彼独自の提案を行おうとしている。本稿は、異なる分野からの提案を心理学的な立場から検討し、その提案が現在の心理学に対して意味のあるインパクトを与え得るものかどうかを考察する。

アルゴリズムと記号計算

まず、Penroseの主張のうち、彼が最も重要だと考えている「意識」がアルゴリズムの産物ではないという提言は、それ自体としてはさほどの重要性を持たないと思われる。ここで問題とされるアルゴリズムは、チューリング機械によって行われる記号計算として定義される。しかし、(全てではないが) かなり多くの認知心理学研究者は、「計算機械」のハードウェアと独立に心理機能を理論化できないという立場に移行し

つつあるからである(e.g., Sejnowski & Churchland, 1989)。

「古典的」な、強いAIのパラダイムは作業仮説あるいはセントラルドグマとして、「計算機械」によって実行されるアルゴリズム、すなわちなんらかの記号によって表される情報を、ある「規則」の集合を適用して処理することが、「心」の「機能」であると考えていた。この場合、実行されるアルゴリズムは、「規則」の集合を適用していく手順を指定するものであって、それ自体は抽象的なものである。したがって、その手順が全く同様に実行可能であるならば、「計算機械」はなんであってもよい(e.g., Marr, 1982)。

そうだとするならば、脳だけではなく、自己言及が可能な程度に複雑な論理システムを「計算」できる「機械」であれば、どんなものでも「心」を宿す可能性がある。これについては、多くの批判が行われた(e.g., Searl, 1980)。しかし、このような記号計算の方法によっては、どうしても解決に到らなかった問題(特に、膨大な情報ストックから、適切な情報を長すぎない「現実的」時間内にとりだすという「完全プティング問題」あるいは「フレーム問題」)を解くことの困難さから、並列機械の可能性を探る方向が顕著になってきた。しかも、記号計算を並列的に行うのではなく、記号自体が「柔らかい」もの、つまりある情報が固定した記号によって表現されるのではなく、記号がシステムの中に分散して表されており、システム全体の並列相互作用の「結果」として、記号が、あるいは情報が「再現」されるようなシステムへと理論研究は向かっ

ている (e.g., Rumelhart, McClelland, & the PDP research group, 1986)。この場合、仮にそのシステムの出力が、チューリング機械のそれと同じものであったとしても、それは「規則」の集合を適用する手順によって計算されたのではなく、パターンの組織化によって(ある意味で)「計算」されたのであるから、Penroseが言う意味でのアルゴリズムを実行しているのではない (cf, Sejnowski & Churchland, 1989 ; ただし、ここでは触れないが、この点はそれほど単純には割り切れないかもしれない ; しかし、少なくとも、Penroseが攻撃している意味での、厳格なチューリング機械、ないしそれと機能的に同等な機械を想定する立場については、すでに作業仮説としても力を失っていると考えてよいであろう)。

もちろん、現在の並列分散システムは現実の脳とは(ほとんど)似ていないので、もしこれが正しいとしたら、やはり、脳以外の「機械」が「心」を持つ可能性は否定できない。もちろん現在の理論やハードの実現が持つ「機能」は未熟なものであって、改良が必要なのだが、むしろどの程度まで脳に近付けないと、十分に脳を近似できないかということが哲学的には重要であろうと思われる(あるいは脳だけでは不十分であって身体もそれに含める必要があるかもしれない)。そして、心理学上の研究戦略としては、可能な限り脳とは異なる、かつ抽象的に記述可能なシステムから出発するべきであろう。少なくとも、人間と同じ身体と脳を持ったもの(要するに人間そのもの)は、(同語反復として)人間であるのは自明であるから、それと同じものを人工的にいきなり作れたとしても、それを「理解」したことにはならない(最も簡単なのは出産である)。それを理解するための理論は、それがなければ「心」ではなくなるという要因を明らかにするために、類似した機能を果たすもの内、少しでも現実の脳と違うものから出発するべきであろう。その意味で「古典的 A I」や「古典的認知心理学」も研究戦略上の通過点であったと解釈してよいように思われる。そして、このような議論が可能であれば、Penroseによる「強い A I」批判それ自体は、哲学的にはそれは

ど重要ではないであろう。しかし、彼がその結論を出すために提案した論拠の幾つかは、心理学的に考察する価値があると思われる。

「思考」と「確信」の問題

Penroseは、少なくとも自分は数学的あるいは物理学的問題を考えているとき、線的に並べられるような推論の筋道は、通常(少なくとも)意識されていないと主張する。解決に到ってから、証明は後で行われる。かならずしも明確に述べられてはいないが、多分に視覚的イメージ的なものが、その思考の媒体となっているようである。もちろん、あらゆる数学的思考がそのように行われているというのではなく、他の数学者との会話から、かなり言語的思考のかたちをとるタイプの人もいることを認めている。しかし、ここで重要な点は、多分これは正しいという「確信」に到達するとき、「意識」的証明を伴っていないこと、および、自分は一瞬にして全体像を把握しているという強い印象を伴っていることである。さらに彼は、モーツアルトの作曲のやり方がこのようなものであったことを引用して、「意識」が、いわゆる物理的時間の流れと性質をもつ「時間」構造の中で構造化されているのではないことを強調する。というのは、音楽自体は時間の流れなしには意味を持たないものでありながら、ある曲の全体が一度に把握されているからである。モーツアルト自身の言葉から判断するなら、「曲全体」が楽譜のような視覚的イメージによって一度に捉えられているのではない。そして、Penrose自身の数学的イメージも単に視覚的に固定した「絵」ではなく、一種一連のものを凝縮したような何かを表しているという。

このような、「印象」に基づく議論をそのまま受け入れてよいかどうか、心理学の立場としては慎重であらねばならない。例えば、彼は、バッハを含んで他の作曲家も、モーツアルトと同様の作曲イメージを持っていたらと主張しているが、少なくとも数名の作曲家については疑わしい(ベートーベンの手書き譜が、モーツアルトと違って、極めて多くの書き直しが加えられているのは有名であるし、またドビッシューはピア

ノなしに作曲する人がいることに驚いたりしている：e.g., Cook, 1990)。ただし、このような逸話がある程度割り引いて評価するとしても、そのような性質をもつ「意識」構造が実際にある可能性は、また別に検討されねばならない。

Cook (1990) は、コンサートで音楽を聴いた後、その曲を自分は知っているという感じがあり、しかも元は時間にそって流れていたものが、単一の高次経験に昇華されてしまったように感じることを述べている。これは単に個人的逸話ではなく、これまでの多くの音楽関係者の発言を集めることによってデータとしての信頼性が与えられている。むしろこれらの作曲家のプロトコルをみれば、彼らは音楽全体の構造を知覚することこそ、その曲を「聴く」ことだと考え、さらに、作品はその点が評価の大きなポイントだと主張する人が多い。しかし、同時にそのような「単一」の経験が、実際に音楽内容の詳細を含んでいないことが多いということも重要である。それを実際に楽器で演奏しようとしても全く不可能であったり、またメロディーを歌うことさえ出来ないことも多い（鍵盤で音を探ろうとしても、それすらできない：Cook, 1990)。それだけではなく、素人はある曲の構成（ソナタ、ロンドなど）を実際に聴き分けていることはほとんどないという実験がいくつかある。たとえば、曲全体の調構造、特に調的閉合が聞き手の反応にさほど大きな効果を持たない：つまり、理論的には曲全体の締めくくりとして変則的な終り方をしても、通常の終止に対して統計的に有意な印象の差は現れなかった（Cook, 1987b)。またCook (1987a) ではかなりの音楽的訓練を受けた学生を被験者としても、彼らの中で未知の曲の主題提示部における反復に気付いたのは半数しかいなかった。ただし、そのような曲「全体」を作り上げている構造について数時間の講義を行った後、「そのこと」を聴くように要求すると、素人でも聴き分けることができるようになる（Smith, 1973)。

Cook (1990) は以上のような音楽心理学的研究と自分自身の音楽家としての経験から、曲全体を表す単一の（時間が凝縮されたような）表象はある種の錯覚

であると結論している。もちろん、比較的短い単位、例えばフレーズであれば、それ全体が一つのものとして経験されるという結論になる実験結果はある（e.g., Deutsch, 1982；また、聴覚より時間幅はかなり狭いけれども、視覚についてさえ、百ミリ秒程度のあいだに起こる複数の視覚刺激は、感覚上統合されてしまったり互いに干渉したりする：e.g., Breitmeyer, 1984)。しかし、ここで問題にしているのは「意識」上の、物理的には時間幅を持っているにも拘らず、それでも同一の「現在」として一つにまとめられる「知覚」ではなく、少なくとも数分以上が経過する経験の全体、あるいは確信を持つためには（普通は）時間のかかる「考察」が必要だと思われるような「思考」が、一つの統合された表象で表されるということが実際にあるのかどうかである。

これは、スキーマ理論やフレーム理論についての構想が仮定するような（e.g., Minsky, 1975) 知識の階層の上部構造のみが「意識」にアクセスされていることを示すのだという解釈を持ち出す論者があるかもしれない。そのような場合、「全体」の大まかな構造が意識されていながら、局所構造をとりだせない、あるいは失われていることも（理論上）あり得るからである。そうだとするならば、全体的には分かっている、あるいは覚えているが、細部を再現できないことになる。しかし、もしほんとうにそのようなことが起こっているのだとすれば、ある曲の「音楽的」構造だけが認識されていて、細部が再現できないというパターンになっていなければならない。実際には、例えば高次構造であるソナタあるいは反復などが認識できていないのであるから、このようなスキーマ理論では、単一的「全体」印象を説明することはできない。一方、Cook (1990) の解釈である「錯覚」も、極めて不満だとすべきであろう。それがなんであるのか全くわからないからである。

さらにもう一つの問題として、このような実験の解釈は、そこで用いられている「測定」との関係を見捨てて考えることはできないということがあがる。しばしば、曲を再現したり、「構造」を答えさせるという方

法が多くとられる。このような方法で測定されたものが実際に表しているのは、いま問題にしている「印象」とは関係がないかもしれない。あるいは測定精度が不十分である可能性もある。つまり、被験者が捉えている「曲全体」が、音楽学的に定義される構造ではないかもしれないこと、またあるいは音楽学的構造であっても、測定がそれを拾えていないかもしれないということである。また、多少異なるものとしては、前述のように、印象として調性構造の一貫性（あるいはそのくずれ）が効果を持たないというものがある。これも同様に、調的閉合が効果を持たなかったのは「好み」に対してであったことに注意する必要がある。個人ごとに異なる好みがあれば（近代・現代和声を好む人が被験者のなかにある程度含まれていたなら）、平均値は有意な相違を示さないであろう。少なくとも、これらの実験から結論できるのは、そのCookが結論した「錯覚」が、これまで知られている、音楽学上の述語では表現できないということである。音楽心理学と音楽学が関わる範囲としては、これまでの作曲家や評論家の言う、「音楽理解のあるべき姿」の心理的実在性が薄い、あるいは「錯覚」であるという結論でよいとしても、一般心理学の問題としては、その「錯覚」の「意識」は研究するべき課題である。

ただし、その結論を出す前に、理論的には、既知感つまり自分が何かを知っているという感じ（Hart, 1965）が、Cook（1990）のいう「錯覚」にあたる可能性も検討しておくべきであろう。Hartによれば、一般的知識についての質問に答えられなかった被験者に、「全く知らない」のか「知っているが思い出せない」のかを評定させたところ、その後の再認検査の成績との間に有意な相関が見いだされている。また、このような既知感には様々な強度があり、その測定を行うためのテスト問題の整備も行われつつある（Nelson & Naren, 1980, 日本版は、川口 & 清水, 印刷中）。しかし、曲の細部について、再生や再構成検査では思い出せないが、その曲全体について、なんらかの単一印象があり、かつそれは単に漠然とした感情のようなものではなく、あくまで「音楽」であるとすれば、や

はり、単なる既知感に還元してしまうのは難しい。もしそれが既知感であるとすれば、覚えているはずなのに、再生できないという「印象」であって、今自分はその曲を歌えないが、ある意味で凝縮された形で意識しているという「確信」ではない。

「意識」される確信

音楽家と数学者あるいは物理学者によって、執拗に主張されるこの「何か」が「錯覚」であるとしても、彼らがこのことについて確信を持っていることがしばしばあるという事実は無視できない（またおそらく多くの素人が初めて聴いた曲についての印象も含めるべきであろう）。多分、証明してみれば正しいという結果が出るはずだという確信を伴った、何らかの全体像（Penroseによれば、かなり高い確率で正しいという）は、少なくとも、前述のように、単なる既知感ではない。意識できないが分かっているという感じではなく、いままさに分かっているという確信を伴った、ある「内容」だからである。

Penrose（1989）は、少なくとも数学について、この確信が生じる原因は、このような統一感のある（一種の）イメージが、数学のプラトニック世界、つまり感覚器官によって知覚される世界ではなく、真である数学的構造（アイデア）の世界の「知覚」であるからだと主張している。通常の知覚が錯覚や見落としあるいは信号のフォルスアラームを起こすことがあるように、このようなアイデアの「知覚」も誤ることはある。しかし、基本的には「真」の「知覚」であるから、かなりの程度正しい。

これは、現在の数学の公理主義からみれば、いささか時代がかった主張に見える（とはいえ公理主義ですべてがおしはかれるかどうかは、また別の問題であろうが）。しかしここで数学についての哲学上の問題を論じる訳ではないので、むしろ、このような考え方が含んでいる前提の方が今は重要であろう。数学的アイデアの実在はともかく、確信を与えるメカニズムとして、「意識」的なアルゴリズムの運用（つまり証明）ではないものを、心理学的には考えなければならない。数

学者が、全てではないにせよ、そのようにして確信を持つこと、さらに、音楽家がそのようにして曲を把握しているという確信を持つことは、事実であり説明されるべきことである。

まず最も単純な仮説としては、パターンマッチングであろう。もし曲の全体、あるいはある数学的アイディアの構造の全体が、何らかの統一パターンに表現されているなら、そのパターンの細部ではなく、主要な構造が何らかの典型パターンと比較される。そして、両者の間の類似度が高ければ、「これは良いものだ」という判断がなされる。しかし、もしこのようにしてアイディアの良否が判定されているなら、もともになる何らかの典型パターンは極度に抽象的でなければならぬ。「良い」あるいは「正しい」パターンは数個の単純な原理に支配されているといえるかどうか、かなり疑わしい。ヨーロッパ音楽において、古典和声の禁則を意図的に破ることは、かなり古い時代にも見られる上、近代以降ではむしろ当たり前になっている（松平、1955）。ここで重要なのは、それまで良いとされてきた和音の連結をわざと外すことで、そこに意外性を発生させて新しい表現を行っていることである。さらに、多くの民俗音楽は、始めからそのような和声法とは全く異なる方法に従っている（松平、1955；ヨーロッパの古典和声からみれば、まったく無茶な不協和音の連続になるものがある）。また、ジョン・ケージの、全く楽音を使わない「作品」、あるいは、そもそも全く音をださない時間という「曲」を音楽と認める人が、かならずしも少ないとはいえない。

このような、「良さ」の多様性を全て取り込める「原理」があって、かつそれを表現するパターンが、はたしてあるものかどうか（あるいは有限個、というより、多すぎない現実的な数でおさまるかどうか）、多分に疑問とせざるを得ない。この「原理」を表現するパターンは、単なる「感じ方」のパターンではなく、新しいアイディアと比較可能な「内容」を持っているからである。もしこの仮説を進めるのであれば、ある特定の価値観あるいは時代様式そして特定個人のもつ何らかの「良さ」あるいは「正しさ」

の典型パターンを仮定せざるを得ないであろう。それなら、まだ（全てを取り込む必要がないので）見込がある。また、そうすることで、天才と言われる作曲家が、時に他の（現在では天才と見なされている）作曲家の曲を全く理解しなかったという逸話（see Cook, 1990）を説明できる（彼の良さ判定パターンが、新しいタイプのパターンとあまりにも違っていた）。ただし、そうだとするならば、数学における「正しさ」のイメージは、特定の訓練を受けた人に特有のものであって、普遍性はないことになる（Penroseが最も受け入れがたいであろう結論である）。問題は、もしこの仮説が正しければ、新しいタイプの芸術が（さまざまな新しい創造上の試みに接したことのない）一般愛好家などに受け入れられるのは、ほとんど不可能に近くなることであろう（単なるひとつの逸話に過ぎないが、この仮説に反する事例として次のものがある。「当時としては全く前衛であったシェーンベルクの無調の曲に感激したのは、専門家ではなく、コンサート会場のドアボーイであった」：Cook, 1990）。

さらに、これは、テンプレートマッチングだけではなく、特徴比較であっても同じ議論がなりたつことに注意されたい。特徴のリストが何らかのベクトルで表現できるなら、上記の問題点はそのままあてはまる（テンプレートマッチングとの違いは、それが実行されるときの効率や有効性の違いであって、目的とする機能自体は全く同一だからである：パターンのフーリエ解析による空間周波数分析も、サンプリング周波数成分の大きさがベクトルであらわされるなら、やはり同じである）。

以上の議論から、マッチング仮説はあまり見込がないように思われる。さらに、そもそも、「良さ」や「正しさ」を（漠然とであれ）定義するような「パターン」をつくれるものかどうか、それ自体が多分に疑問である。そこでもう一つの可能性としては、ゲシュタルト心理学が提起していた「良いパターン」の特性を挙げる論者がいるかもしれない。ゲシュタルト心理学者達はおもに視覚的パターンを使って、「滑らかな連続」などの幾つかの「法則」を見いだしている。つま

り、パターン自体に、人間が良いとみなすものがあるということである。しかしこれは、仮説としてはほとんど無意味である。今は、そのように意識されることを問題にしているのであるから、ゲシュタルト的良さといっても、ほとんど同語反復である。また、並列分散処理における、パターンの結晶化もここでは有用な概念ではない。Smolensky (1986) は、ボルツマン機械のハーモニー理論において、パターンの結晶化が起こったとき、その内容が意識されると考えている。しかし、もしそれが正しいとしても、「良い」あるいは「正しい」パターン以外のものも、意識されることは当然あり、このときあるパターンには強い確信が持たれるが、他のパターンにはそうでないことの説明にはならない。結局これも、何か他の基準と比較されねばならず、前述のパターンマッチングについての議論がそのままあてはまる。

「錯覚」という表現にこだわるなら、その単一イメージは実際には内容を含まず、単に演奏を聴いているときの感情と漠然とした響きの記憶だけがあって、それがあたかも「内容」まで含んでいるかのように想起されているという仮説も考えられる。しかしこれが素人による音楽の記憶であれば、説明できるかもしれないが、数学について、証明はしていないのに正しいだろうという確信について（しかもしばしばその確信は当たっている）全く解釈が出来ない。音楽についても、(すべての作曲家ではないにせよ) 曲全体をいちいち意識的に作り上げたわけではないのに、すでにその曲は完成しており、全体として把握できているという確信（そして実際にそれを書き下ろすことができる）も同様である。厳密には、素人の音楽の単一統合イメージについても、若干の問題がある。前述の既知感についての研究が示すように、今は思い出せないが実際には知っているという既知感はかなり正確さをもっている。そうだとするならば、その曲の統合イメージが内容を含んでいるように感じられている理由を上記の仮説で説明できているかどうかははっきりしない。自分が内容を知っているという感じがあっても、前述のように、これは既知感で説明はできないからである。つ

まり、この一種の確信はやはり説明できたとは言いがたい。そのような確信を伴わない、感情や雰囲気記憶もあり、それらとの違いを（条件を特定して）説明できなければ意味がない。

「意識」と「無意識」

前節では、Penrose (1989) や音楽家の主張する、「意識」の、ある特性（であるかもしれないもの）について、機能主義的説明を考察した。しかし、さしあたり、ある確信を伴うような、時間が凝縮された全体像（と感じられているもの）がなんであるか、現存の機能的理論で説明するのは、無理があると結論してもよいであろう。むしろこれは、「意識」の現象的性質に関わるものとして、まだ見いだされていない「意識」理論に、ある提言を示唆するものだと考える方がよいのではないかと思われる。

臨床心理学では伝統的に、フロイトやユングの主張と並行して、「意識」は理解可能なものであって、無意識はイメージが重なり合った複合体や不合理なものを含み、時には神秘的雰囲気すらそこに語られるようなものだとされることが多い、一方、Marcel (1988) は、そのような「無意識」と区別するため、「非意識」という用語を提案したが、これは意識できない（あるいはしていない）情報処理過程と情報のストックを指している。今、「意識」と「非意識」という対立を考えると、ここまでの議論から、むしろ「意識」の方が、理解し難い奇妙なものを含んでいるといえよう。「非意識」は、機能主義的理論によって、むしろ理論化し易いのである (see, 妻藤, 1990)。そして、Marcel (1988) は、フロイトやユングの「無意識」が単に「意識」されていないものではなく、「意識内容」が抑圧されたものとして、「非意識」と区別することを提案している（精神分析での無意識は、一部「非意識」を含んでいるが、混乱を避けるためにこのように分ける）。さらに、「非意識」の「内容」は「意識」のそれとは表現形式が異なっており、いま意識されていない内容が「意識」に呼び出される、あるいは取り出されるのではなく、全く別の表象の形式で新たに表現され

たものが「意識」内容である。

このように定義すると（異論はまだあるかもしれないが）、かなり見通しが良くなるように思われる。抑圧された「無意識」内容は結局「意識化」が可能な形式を持っているので、基本的性質は同じものである。実際、「無意識」の「不思議な」構造が語られるときも、例えば夢の解釈あるいは、自由連想の解釈からである。つまり、何人もの人が重ね合わせになっているような夢のイメージといっても、それは「意識」されている内容が、これは特定の人ではなく何人もの人の重ね合わせだという印象を持っている、あるいは「そのように解釈される」のである。また、そのときはそのように感じられておらず、「分析」によって明らかになったという場合があっても、やはり、それは「そのようなもの」として了解されるという点で「意識」されることに違いはない。もちろん、（精神分析の正統的立場では）、それは無意識の内容を意識的イメージで象徴しているのだと主張されるであろうが、それはそれで、「意識」の性質なのである。言い替えると、「解釈」の結果そのような複合イメージが、例えば、（意識されていないが、「無意識」の中に隠れている）ある人への憎しみを「象徴」していたのだとしよう。あきらかに一貫して筋の通る構造を持っているのは「無意識」あるいは「非意識」のほうであって、了解の困難な内容になっているのは「意識」の方であろう。

もちろん、意識されていない事柄がすべて、一貫して筋が通っているというのではない。そうではなく、この一貫性とは視点が異なれば変わるものであって、自分が（あるいは他人が）一貫していると思いたいという動機を前提にして、意識されていない事柄を、「意識」を通して見ると、一貫していないように見えるという仮説を提案しているのである。例えば、ある人が、昨日言ったことと、今日主張していることがまるで逆であっても、単にその場での責任逃れのためにそのようにしている、あるいは、何か認めたくないことがあって、それを（自分からも）隠すために（抑圧するために）、言動が一貫しないのかもしれない。しばしば、このような例が、「無意識」の捉え難さを示

すものとされるが、しかし、そうだとするならば、精神分析的解釈自体が、クライアントに了解されたときノイローゼがなおるといのはおかしい。それは（論理的であろうがなかろうが）「了解可能」なのであるから、むしろ、（精神分析の諸理論が正しいというのなら）、ノイローゼなど事態を難しくしているのは、それをどのように（象徴的に）意識するかということの方だといってもよいであろう。結局意識されていることを通して、そうでないことを押し量るのが難しいのである。

認知心理学系統の理論では、意識されている事柄は（感情も含めて）、自分に起こった出来事について、ある視点からの（そしてある思い込み、知識構造に制約された）解釈の結果であると考えている（e.g., Mandler, 1984 ; Holland, Holyoak, Nisbett, & Thagard, 1986）。これと、上記の精神分析的（あるいは分析心理学的）理論の解釈とを結合することで、ひとつの示唆が得られよう。つまり、「意識」されている内容とは、何かその人に関連して起こったこと（内的であれ外的であれ）を、その人の生きられる世界（妻藤, 1992参照）に位置付けるために、その世界に矛盾なく置けるように解釈された結果が意識されるとしてみよう。哲学上の著作を引用するまでもなく、「事実」とは結局ある記述方式（そして、知識・信念）に従って述べられる何かである。そうでなければ、意味をなさない：例えば、「私は今、その人が言ったことに腹が立っている」（という原因帰属）なのであって、「私の体に分泌されたアドレナリンがいつもより多く、かつ、その原因は直前に耳に入ってきた音声で、これこれのパターンを持っていたため、これこれの情報が…」ではない。もちろん、後者は心理学か生理学の研究をしているときには意味をなす（ただし、そのような記述を行う背景には、大量の仮説と概念上の前定がある；脳の神経ネットワークを研究している人と、生化学を研究している人では違う「記述」をするかもしれないし、まして物理学者は全く違うことをそこに見るかもしれない）。一方、アドレナリンの量や脳内の情報処理過程が直接知覚される訳ではないので、「生きられる世

界」での「事実」は通常は前者である。

そして、「そこ」に自分自身の一貫生を保とうとする傾向が非常に強い（Festinger, 1957：例えば、それまで意識されていた自分の態度と行動が一致しなくなると強い認知的不協和〔不快感〕が発生する）、「記述」は「私」の一貫生を保つために歪められるかもしれない。精神分析で重要視される防衛機制はこのようなフレームで定義しなおせる可能性は強いであろう。実際、精神分析で仮定されている機能的メカニズムを現代の認知心理学によって置き換える試みが、幾つかある（e.g., Erdelyi, 1985；Mandler, 1984）。これに上記の「象徴的表現」を加えることで、以下に述べるような形で、Penroseの主張を現行の心理学のフレームに取り込めるかもしれない。

音楽の聴取において、次々に展開される音列はその都度何らかの感情を伴う印象を発生させるものとしよう（現代音楽の作曲家は異論をとらえるかもしれないが、ここでは、素人の音楽聴取、あるいはプロであっても、近代以前の音楽ないしポピュラー音楽を念頭に置く）。そして、その印象は音楽上の時間的順序にしたがって記憶に残る。ただしこれは単に感情的な内容ではなく、ある程度は実際の「音」の動きかたの印象として記憶されるという仮定を置く。これは、音楽の記憶としては極めて不完全であって、後で音として再生することはできない。しかし、だからといって、記憶がないのではない（何度も繰り返して聴けば、次第に、具体的に思い出せる音としての内容が増えてくるはずであり；また実際にそうである）。このような「記憶」は、直接には想起できない。なぜなら、具体的に思い出すには、「音」を再生しなければならないからである。しかし、それに必要な情報は保持されておらず、大まかな音の動きとそれが作り出す感情あるいは美的印象のみである。そこで、知ってはいるが、具体的に「意識」できないという事態が生ずる。しかし、実際に「その意味での記憶」ははっきりとあるので、自分がその曲を知っているという確信は強く現れるであろう。これは単に既知感ではない。知っているはずなのに思い出せないのではなく、知っているのだ

が、それを他者に伝達可能な形で、あるいは鍵盤上に表現することができない；それは「音」そのものではなく、それが作り出したものだからである。それを伝達可能な形で表現するには、「音楽」を再生するしかない。しかし、音楽的素養の不足、あるいはプロでも一度の聴取では十分な「音」についての情報が確保できないため、それができない。

このような仮説を立てることが出来るなら、ここまで問題にしてきた、時間が凝縮された単一のイメージとは、そのような、表現手段をもたないものを「象徴」する一種の雰囲気表現するような「意識」内容だということになる。モーツァルトは、「非意識」的に「音」のレベルまで完成している曲を、この象徴を使って一度に意識していたのであり、そして数学者は、ある（具体的）表現を与えないと、一つ一つの内容を意識できないが、実際にはすでに「非意識」のレベルで完成に近付いている数学的構造があり、ただそれを（一つ一つ）意識するための表現方法がまだ出来ないときに、音楽のときと同様、それを象徴するような、ある統一印象（内容はあるが、外に表現できないもの）として確信をもつのであろう。これは、大きな階層構造の上部だけを表すスキーマではなく、また一般的良さを表すパターンとのマッチングの結果生まれる「良い」という印象でもない。

結論と要約

妻藤（1992）は、内容は豊富だがそれをそのまま他に伝えることができず、また自分にとって固有のものであるとしか受け取ることができないという「確信」を伴っていることが（その「確信」が正しいかどうかは別として）、生きられる「意識」の十分条件であると結論した。ある意味での客観性をしめすような、メタ「意識」の対象は、そのときこのような「意識」の「様体」を失う。このときの「対象意識」は、「意識」としての必要条件は満たしていても、十分条件ははざれている。これまでの認知心理学が提案してきた「意識」の理論的モデルは、後者であった。そのため、これらの理論的アイディアが、何かをとりこぼしている

という印象が残るのだと解釈されている。

この仮説的フレームが正しいかどうかは今後の問題であるが、このフレームを用いることによって、(前述のように、これまでの理論では、「錯覚」としかいいようのなかった)、数学や音楽の超時間的イメージの心理的「実在」を仮説として認めることができるであろう (Cook, 1990, のような解釈では、「錯覚」であって、それ以上追及する必要は認められなくなってしまう)。また、このことは、妻藤 (1992) の提案する、「確信」の在り方に2通りあるという仮説とも整合的である。ある確信の根拠を問えば、何らかのことが「語れる」ような確信と、それがどんな形式でもできないものとである。前者は、客観化された「意識」つまり十分条件を満たさないような、対象としての「意識」における確信であるが、後者は対象化されていない、そこに生きられる「意識」であるから、確信は(「意識」の上では)ただ単にあるだけなのである(その確信の前提となるプロセスは「非意識」のまま、今現在「生きられている現実」として「内容」が「意識」されている)。そして、ここでは、「非意識」あるいは「無意識」の中で何らかの内容が成立しているとき、それを(他人にも伝えられるような)ある意味で客観的(具体的)表現ができないもの(内容は豊富だが、伝えようがないもの)を象徴する(おそらくは生き生きした、しかし言葉にはならない)印象あるいは一種のイメージが、この2番目の意味での(高い)確信を与えるということになる。

現時点では「意識」の、研究すべき、あるいは心理学的に研究可能な性質の見当を付けるための議論の段階であって、直接の実験的証拠を挙げることは、かならずしもできていない。ただ、妻藤(未発表)では、実験的に、異なる関数に従う2種類の確信度評定を見いだしてはいる。これが、上記の仮説的フレームが主張する2種類に当たるかどうかは、まだ今後の問題である。

文献表

- Breitmeyer, B.G. (1984) *Visual masking: An integrative approach*. Oxford: Clarendon Press.
- Cook, N. (1987a) Musical form and the listener. *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 46, 23-29.
- Cook, N. (1987b) The perception of large-scale tonal closure. *Music Perception*, 5, 197-205.
- Cook, N. (1990) *Music, imagination, and culture*. Oxford: Clarendon Press.
- Deutsch, D. (Ed) (1982) *The psychology of music*. Academic Press.
- Erdelyi, M.H. (1985) *Psychoanalysis: Freud's cognitive psychology*. New York: Freeman and Company.
- Festinger, L. (1957) *A theory of cognitive dissonance*. Stanford: Stanford University Press.
- Hart, J.T. (1965) Memory and the feeling-of-knowing experience. *Journal of Educational Psychology*, 56, 208-216.
- Holland, J.H., Holyoak, K.J., Nisbett, R. E., & Thagard, P.R. (1986) *Processes of inference, learning, and discovery*. Cambridge: The MIT Press.
- 川口潤 & 清水寛之(印刷中) 一般的知識に関する質問群を用いた既知感の測定. 心理学研究.
- 松平頼則(1955) 新訂: 近代和声学: 近代および現代の技法, 音楽之友社
- Mandler, G. (1984) *Mind and Body: Psychology of emotion and stress*. W.W.Norton & Company, Inc.
- Marcel, A.J. (1988) Phenomenal experience and functionalism. In A.J. Marcel & E. Bisiach (Eds), *Consciousness in contemporary science* (pp.42-77). Oxford: Oxford University Press.
- Minsky, M. (1975) A framework for representing knowledge. In P.H. Winston (Ed), *The psychology of computer vision*. McGraw Hill Press.
- Nelson, T.O., & Narens, L. (1980) Norms of 300 general-information questions: Accuracy of recall,

- latency of recall, and feeling-knowing ratings.
Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior,
19, 338-368.
- Penrose, R. (1989) *The emperor's new mind*. Oxford: Oxford University Press
- Rumelhart, D.E., McClelland, J.L., & the PDP research group (1986) *Parallel distributed processing: Explorations in the microstructures of cognition. Vol.1: Foundation*. Cambridge: The MIT Press.
- 妻藤真彦 (1990) 認知心理学における「意識」と「測定」
In 大阪市立大学文学部心理学教室四十年のあゆみ (pp. 564-576)。大阪市立大学文学部心理学教室。
- 妻藤真彦 (1991) 認知理論における「自己像」の機能的役割。
美作女子大学・同短大部紀要, 36, 1-10.
- 妻藤真彦 (1992) 「意識」概念の心理学的再構成: コウモリではなく人間であるとはいかなることか。美作女子大学・同短大部紀要, 37, 1-10.
- 妻藤真彦 (未発表) 確信度に関する2つのモード。
- Searle, J.R. (1980) Minds, brains and programs.
In *The behavioral and brain sciences, Vol.3*. Cambridge University Press, reprinted in D.R. Hofstadter and D.C. Dennett (Eds), *The mind's I*. Basic Books, Inc., Penguin Books Ltd, Harmondsworth, Middx. 1981
- Sejnowski, T.J. & Churchland, P.S. (1989) Brain and cognition. In M.I. Posner (Ed), *Foundations of cognitive psychology* (Chap.8). Cambridge: MIT Press
- Smith, A. (1987) Feasibility of tracking musical form as a cognitive listening objective. *Journal of Research in Music Education*, 21, 200-213.
- Smolensky, P. (1986) Information processing in dynamical systems: Foundations of harmony theory. In D.E. Rumelhart, J.L. McClelland, & the PDP research group (Eds) (1986) *Parallel distributed processing: Explorations in the microstructures of cognition. Vol.1: Foundation*. Cambridge: The MIT Press.

(1992年12月1日受理)